



芝小だより

第十二月号

発行所 港区立芝小学校
〒105-0014
港区芝 2-21-3
[TEL:03-3456-3072](tel:03-3456-3072)
FAX:03-3456-3071



感動をつなげていく

―開校記念式典から音楽会へ―

校長 齋藤幸之介

去る十一月十七日には、本校開校百四十周年記念式典を挙行いたしました。当日は、多くの御来賓の方々に御参列をいただきました。式典を滞りなく終了できましたのも、地域の方々、保護者や御家族の皆様の御理解と御協力があったること、と改めて感謝する次第です。

式典全体を通して五・六年生が参列しましたが、子供たちが百四十周年を祝う「よろこびの言葉」では全校児童が表現をしました。シンフォニックフラスの演奏をバックに四・五・六年生が言葉で本校の歴史を伝え、「ふるさと」(作詞 小山薫堂、作曲 youth case)を歌いました。続いて行った全校による「五拍子の舞曲」では、手拍子の音の大きさを変えたり交互に手を打ったりして「芝っ子」らしさを表現できました。本校校歌の作詞者でもあられる高野辰之先生が作詞された「ふるさと」(作曲 岡野真一)を全員で歌い、最後は、御来賓の方々と共に校歌を斉唱しました。フロアのみならず、二・三年生はギャラリーから表現をしました。重層的な歌声、そして真剣に拍を刻んだ手拍子は御来賓の涙を誘うほどでした。どなたも口々に子供たちの表現の素晴らしさを高く評価してくださいました。

芝っ子の音楽は人々を感動させました。そして、この感動を、私は音楽会につなげたいと思います。

音楽に触れるといっしょに

脳科学者として有名な茂木健一郎氏は、自身の音楽との関わりを例にも挙げながら、音楽に触れる素晴らしさを述べています。素晴らしい音楽に出会って心が揺さぶられたことは自分の中から消えることがない、と茂木氏は言います。確かに、生演奏はそのときだけのもので二度と戻らない、またこのときの記憶は段々と薄れていく、しかし、「かすかなその記憶は、ある種の生々しい質感となり、抽象的な感覚として再現され得るものに生まれ変わっている」ということなのです。そして、美しい、嬉しい、悲しい、楽しい、といった感動の記憶によって「自己の価値基準を生み出し、現実を現実として自分のものにできる」のであり、「本当の感動を知っている人は、強い」と述べています。子供たちが演奏し、互いの音楽を聴くことは一人一人の感動につながり、そして人生を豊かにする、と捉えることができます。

感動するときの脳のはたらき

茂木健一郎氏は、また人が感動するときの脳の働きについて以下のように述べています。人間の脳には情動系のシステム、つまり感情を司っている部分があり、そこで今までの自分の体験やこれまで築いてきた価値観と照らし合わせるという作業をしているのだそうです。そして、今体験していることを、脳が「自分自身を変える大きなきっかけになる情報 came」と察知したときに感動が起るのです。感動は、脳が記憶や感情のシステムを活性化させて、今まさに経験して

いることの意味をつかんでおこつとする働きである、ということになるそうです。

茂木氏は、子供の頃の感動についても述べています。「すべての経験が初めてなわけですから、脳はできる限りそれらを記憶に留めようとする。その作用が次々と感動を生み出します」。だから、子供たちは多くのことに感動をします。

本年度の音楽会の体験が感動となり、子供たちの中にできるだけ長い間存在することを願っています。

子供たちは当日、開校百四十周年のお祝の気持ちも込めて演奏をします。そのために、今さらなるレベルアップを図るべく一所懸命に練習に取り組んでいます。日々、歌声が美しくのびやかになり、また、様々な楽器を重ねるその重厚とも言える音色が高らかに響いています。

茂木氏は、「耳をすまます」大切ににも言及しています。「雑音にまみれた私たちは、大切なことをずいぶん聞き逃してしまっているような気がしてならない」。私は、演奏を「耳をすまし」て聴いて子供たちの素晴らしい姿に感動しながら、子供たちの音から本校の教育を再考したいと思います。地域の方々、保護者や御家族の皆様には、子供たちの活躍する姿に御期待をいただければと思っています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(参考) 「すべては音楽から生まれる 脳とスーパーレトルト」

茂木健一郎 (PHP新書)
茂木健一郎 (PHP文庫)